5月号

月刊ふじ

≪今月の表紙≫

美術部　共同制作

今号の内容

【特集】

「合唱コンクールのパンフレット」

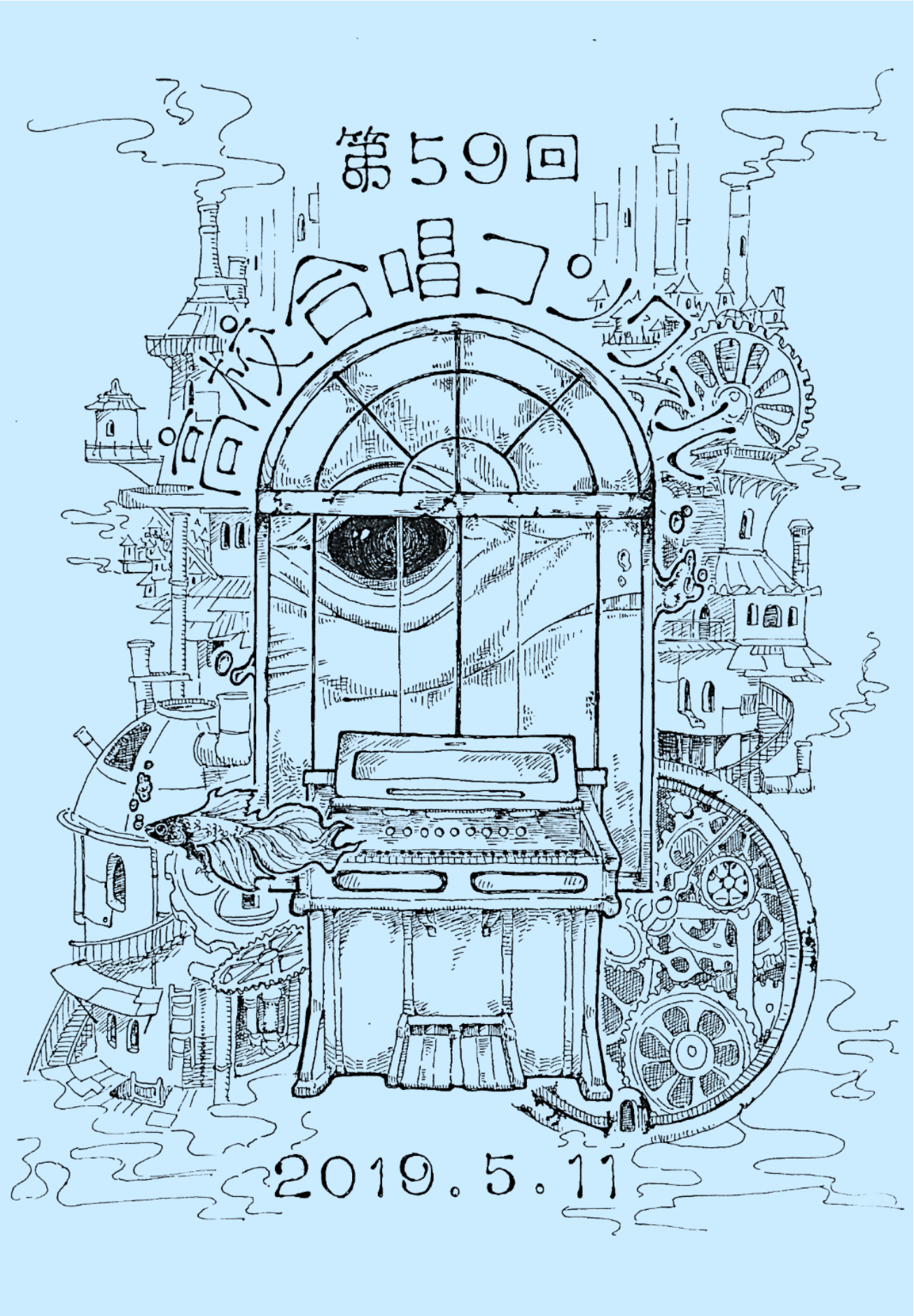
美術部　「共同制作」

書道同好会　「校内作品展」

国語　「中３　アンソロジー」

合唱コンクールのパンフレット

五月十一日に高校合唱コンクールが行われました。配布されたパンフレットには、各クラスが自分たちの演奏に込める思いがつづられていました。このパンフレットの表紙には生徒の投票で選ばれたイラストが使われています。今回は文化委員長の引継ぎファイルに残されていた過去のコンクール表紙イラストもまとめてご紹介します。

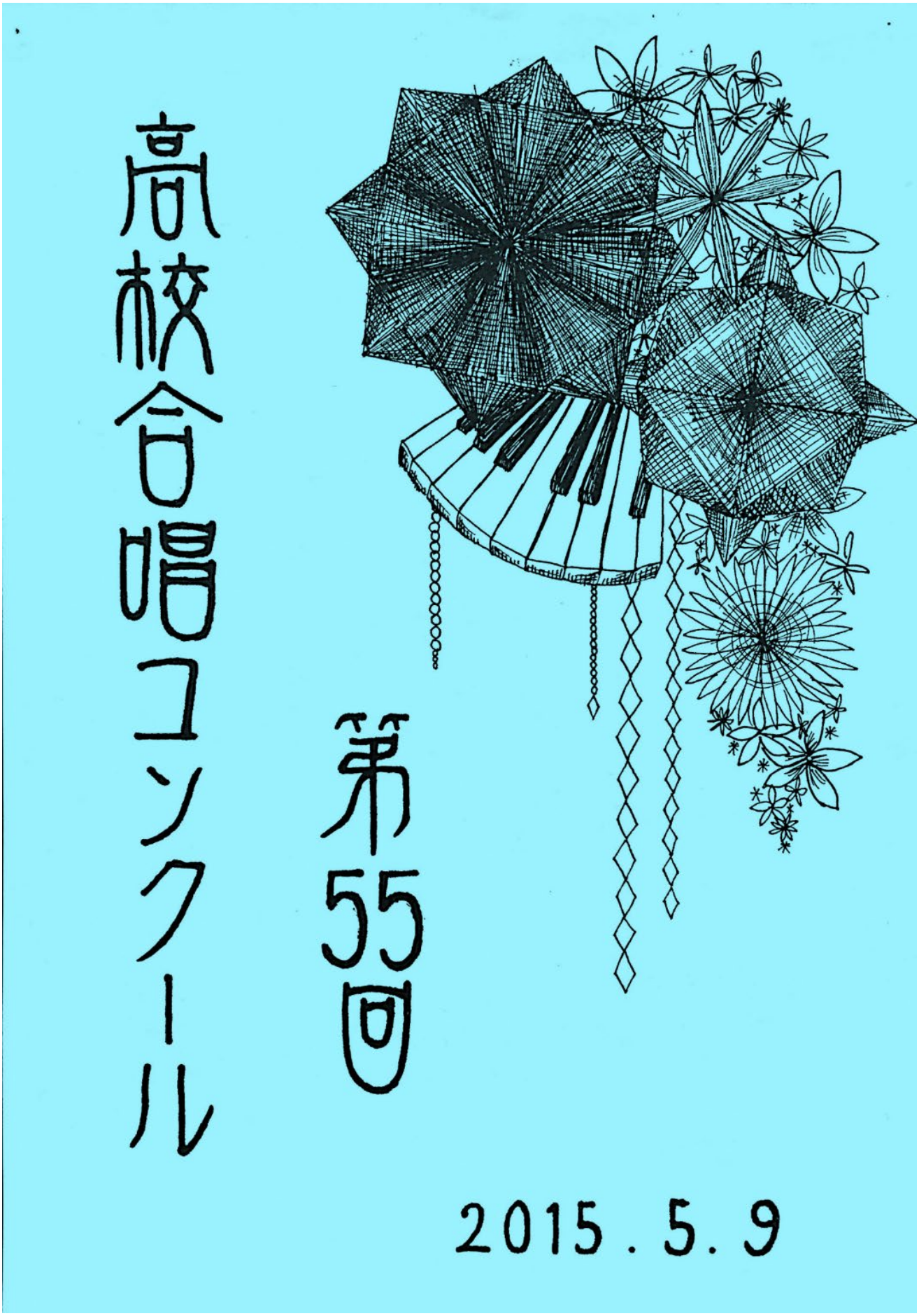


高３　Ｋさんの作品

高２　Ｋさんの作品（高１の時の作品）

卒業生Ｔさんの作品（2017 年当時 高２）

卒業生Ｎさんの作品（2016 年当時 高３）



2016 年と同じく卒業生 N さんの作品（2015 年当時 高２）

こちらは発掘された応募作品

卒業生Ｉさんの作品（2015 年当時 高３）

同じく、発掘された応募作品

卒業生Ｔさんの作品（2015 年当時 高３）

美術部　共同制作

今号の表紙を飾ったキリンのイラスト。美術部員約五〇名が力を合わせて描きあげた共同制作作品です。

代表者が下絵を考えた後、用紙を分割してそれぞれに細かな模様で埋め尽くしました。間近に寄っても、遠く離れて鑑賞しても楽しめる作品です。

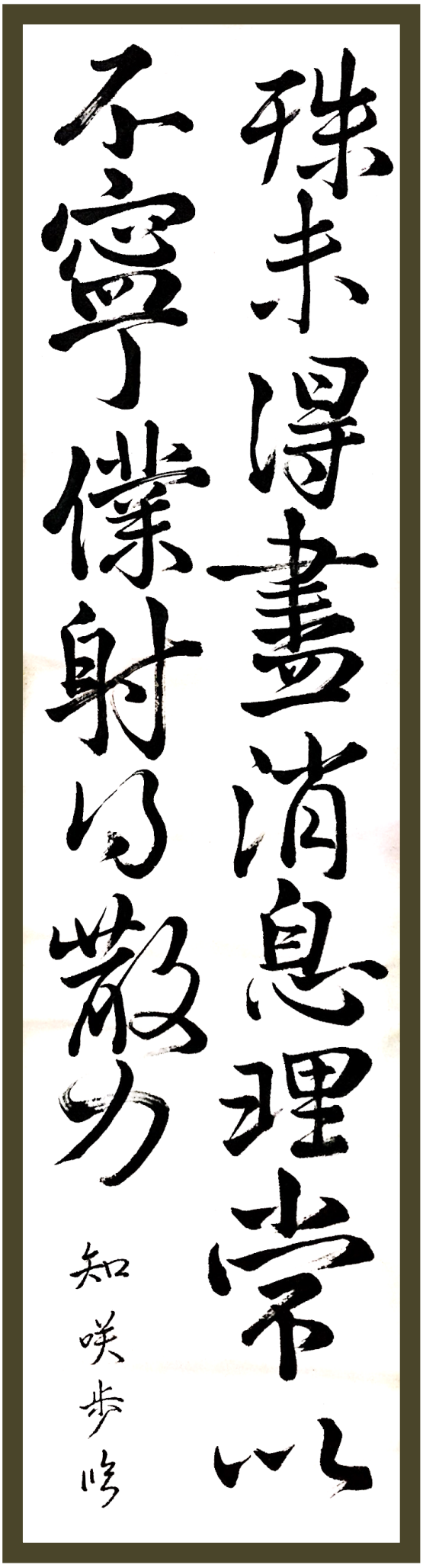
美術部　共同制作「キリン」

「キリン」部分

書道同好会　校内作品展

学校祭では同好会皆で一つの大きな作品を作り上げますが、個人の練習の成果として校内作品展を行っています。

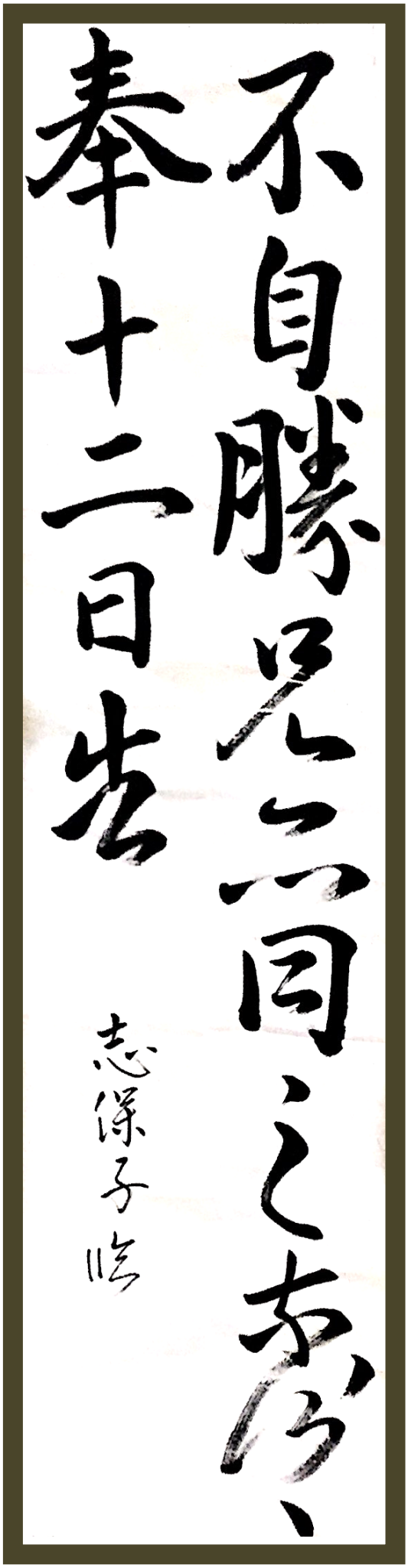
作品展では漢字の臨書や色紙に取り組みました。臨書では文字の特徴をよく観察することを大切に練習。色紙は好きな漢字一字を書体を工夫して表現しています。



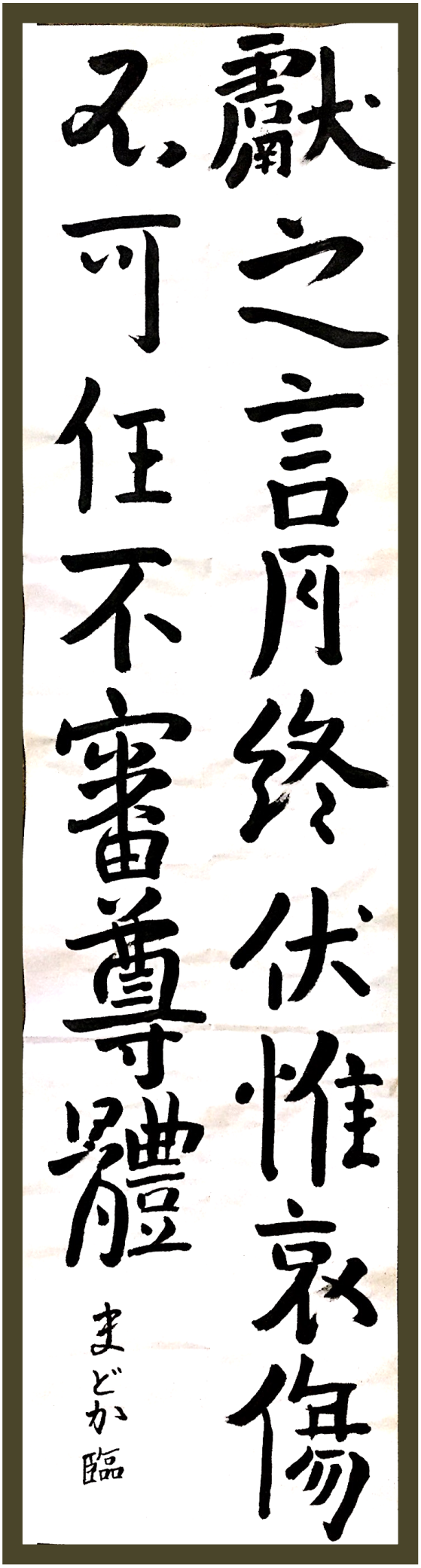
高二　Mさんの作品

敬

懸



高二　T さんの作品

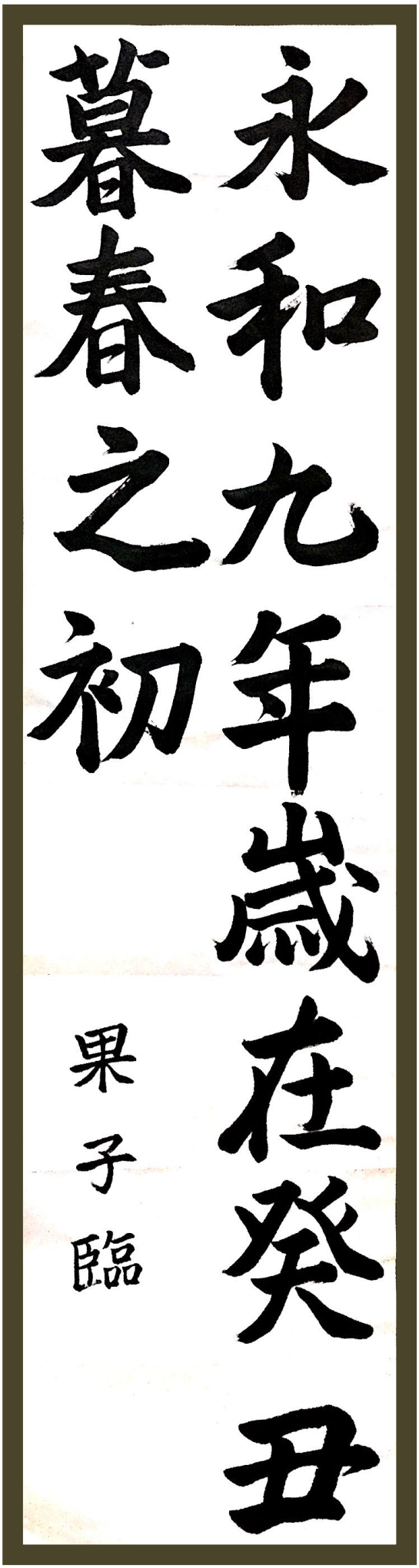


高二　Mさんの作品

高一　Kさんの作品

樹

深



中三　Sさんの作品

藤
果

智
果

中三　アンソロジー

卒業ノートより

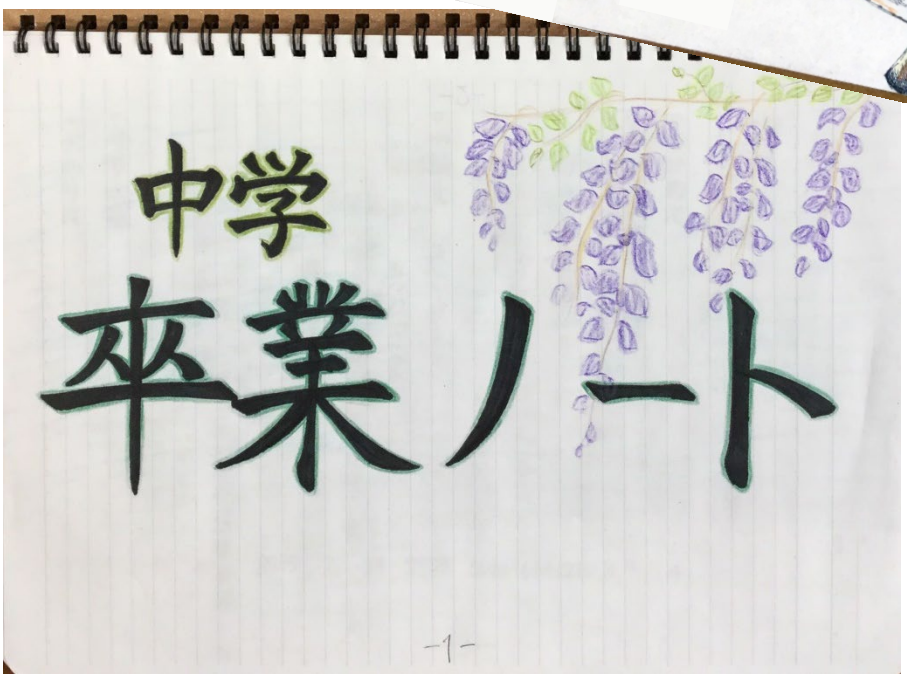
藤女子では、三年次に約半年かけて一冊の卒業ノートをつくります。

ノートは、テーマを決めて好きな詩を集め、鑑賞文を付すアンソロジーと、興味のあることを調べて自分の意見を述べる小論文から成ります。

今回は数名のアンソロジーの中からいくつかの詩を抜粋してご紹介。生徒がつけたオリジナルの挿絵とともに味わってください。

中学
卒業ノート

中学
卒業ノート


中学
卒業ノート
-1-

Ｋさんのアンソロジーより

どこかで

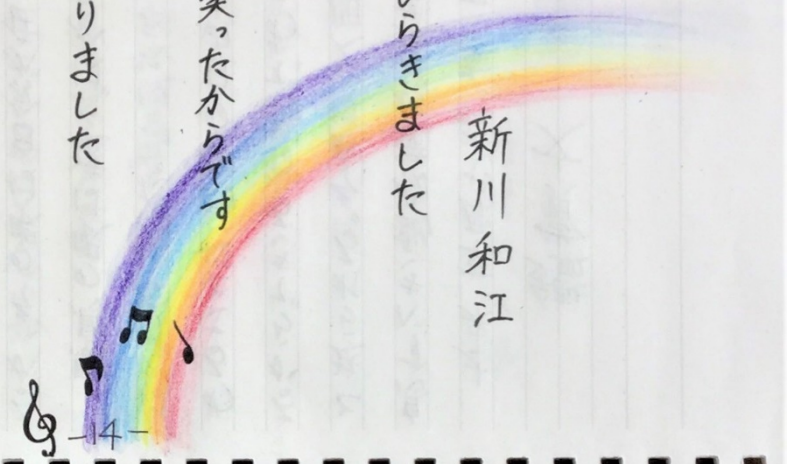
新川和江

コップの　ばらが　ひらきました
ちょうど今
世界のどこかで
子どもが　ふふふ　と笑ったからです

きれいな　虹が　かかりました
和んでいる空
世界のどこかで
子どもが　うたを　うたったからです

小鳥が　ぱっと　とび立ちました
ゆれている枝
世界のどこかで
子どもが　いきなり　かけ出したからです

（「春とおないどし」若神社　一九九一年）



鑑賞文

三連あるが、どれも決まった形式にはまっていて、少しずつ前進していく様子が、じわじわと伝わってくる。

第一連は、生まれたばかりの赤ちゃんが、家族に囲まれて嬉しそうにしている様子、第二連は、まだ幼いが幸せを一心に受けてのびのびと育っている様子、第三連は、成長した子どもが、自立していく様子を表しているのだと思う。また、第三連は、鳥がはばたいて少しだけ風を起こすように、かけ出した時のスピード感を表現していると思った。

シンプルで素直な詩だが、温かさや幸福、力強さ、嬉しさを連想できて、非常に興味深い。さらに、『どこかで』ではなくて、「世界のどこかで」とすることで、ばらがひらいたり、虹がかかったり、小鳥がとびたったりすることが、滅多にない奇跡のように感じるのだと思った。

ひとり林に

立原道造

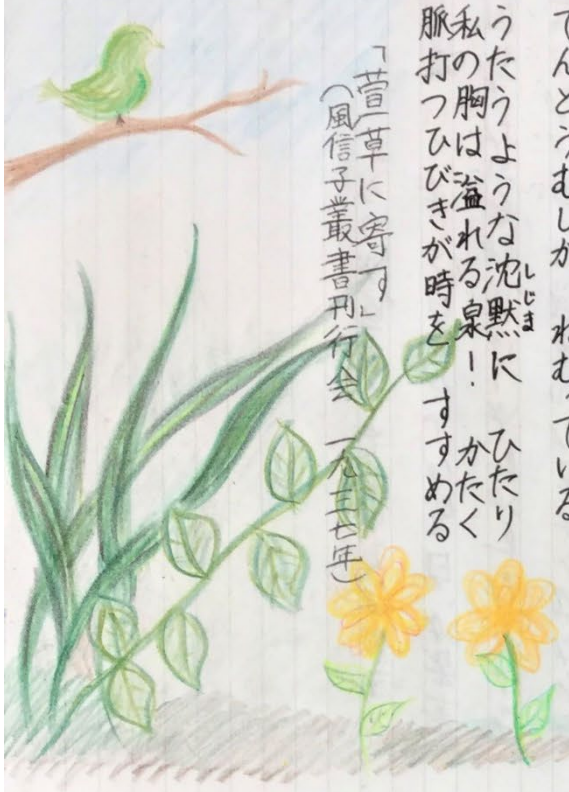
だれも　見ていないのに
咲いている　花と花
だれも　きいていないのに
啼いている　鳥と鳥

通りおくれた雲が　梢の
空たかく　ながされて行く
青い青いあそこには　風が
さやさや　すぎるのだろう

草の葉には　草の葉のかげ
うごかないそれの　ふかみには
てんとうむしが　ねむっている

うたうような沈黙に　ひたり
私の胸は溢れる泉！　かたく
脈打つひびきが時を　すすめる

「萱草に寄す」
（風信子叢書刊行会　一九三七年）



鑑賞文

森の中、目を閉じれば鳥の啼き声や木々のゆれる音がきこえる。そこに、誰かがいるわけではなくて、ただ自分が存在しているだけだ。

この詩で表現されているのは、自然そのものである。「社会」のつながりの中で生きて、評価される生活を送っている私達とは真逆だ。自然の中だったら、たとえ美しい花であっても、誰に会うこともなく死んでいくのが、珍しいわけではないのだ。花は人間とは違うが、「そういうこともあるのか」と思うだけで、重荷が減って、心が洗われたような気持ちになれる。洗練された、自然のままの言葉のひびきが、そのような気持ちにさせているのかもしれない。

悠遊

相田みつを

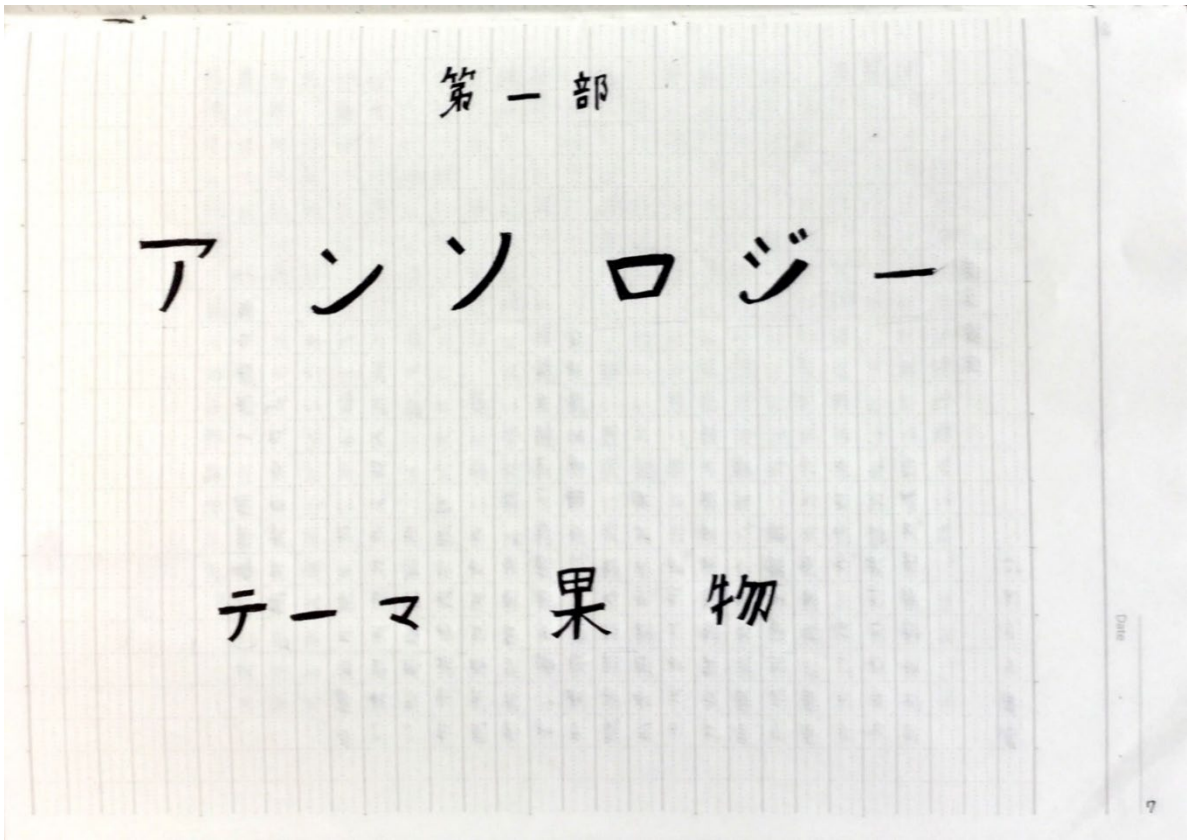
空を見上げて
ごらん
ゆったり
悠遊
雲もゆうゆう
鳥も悠遊
小さな自分が
わかるから

「空を見上げて」
（株式会社ダイヤモンド社　一九九七年）

鑑賞文

私は、相田みつをさんの詩が好きだ。教訓を教えてくれるが、決して上から目線ではなくて、頭の固い人では思いついたり、気付いたりできないような視点で表現されていることが多い。

『悠遊』という言葉は、おそらく「悠悠」からきていて、ゆったりとして、いそがないようすを表す。勉強や仕事でせかせかしている時期にこの詩を読めば、「小さな一人の人間が、なんでこんなにもせかせかしているのだろう。」と思うに違いない。私達の心に、穏やかさを取り戻させてくれる誰もが読むべき詩だと感じた。また、「雲もゆうゆう」とあえて平仮名にすることで、ゆったりと空を浮いて風に吹かれている雲を容易に想像することができるのだ。



Ｅさんのアンソロジーより

ぶどうのつゆ

まど・みちお

私の中におちてくる
ブドウのつゆの
この一しずくの　あまずっぱさが
こんなにはるかな光の尾をひくのは
そのはじめ
かみさまの　仁の中に
生まれでた思いだからなのか

そして私にたどりつくまでの
なんおく年間
そんなにまぶしい銀河の中を
めぐりめぐっていたからなのか

クモの糸よりも　ほそい
一すじのせせらぎとして
ブドウのつゆの
この一しずくのあまずっぱさが
こんなにはるかな光の尾をひいて
星がおちるように
私の中にきえていくのは

「日本語を味わう名詞入門20」
（あすなろ書房　二〇一三年）

10

作者がぶどうを食べた時に感じたことが書かれています。とてもみずみずしくておいしいぶどうだったのだなと思いました。ぶどうがのどを通って胃に落ちていく感じと、ぶどうが通った道筋に残る甘酸っぱさが伝わってきます。何億年も前から銀河をめぐってきた想いが光を放ちながら体の中に消えていくように感じるほどおいしかったことが伝わってきました。

レモン哀歌

高村光太郎

そんなにもあなたはレモンを待つてゐた
かなしく白くあかるい死の床で
わたしの手からとつた一つのレモンを
あなたのきれいな歯ががりりと噛んだ
トパアズいろの香気が立つ
その数滴の天のものなるレモンの汁は
ぱつとあなたの意識を正常にした
あなたの青く澄んだ眼がかすかに笑ふ
わたしの手を握るあなたのかの健康さよ
あなたの咽喉に嵐はあるが
かういふ命の瀬戸ぎはに
智恵子はもとの智恵子となり
生涯の愛を一瞬にかたむけた
それからひと時
昔山嶺でしたやうな深呼吸を一つして
あなたの機関はそれなり止まつた
写真の前に挿した桜の花かげに
すずしく光るレモンを今日も置こう

「詩集『智恵子抄』」
（日本図書センター　一九九九年）

死ぬ直前の智恵子は、レモンを食べて一瞬意識が戻ります。レモンの黄色、香気、レモンの汁は生を感じさせ、命の瀬戸際にいる智恵子との対比が鮮やかだと思いました。死の床の「静」がりりと噛み、笑い、手を握る「動」そして深い眠りにつく「静」という、「静」と「動」の変化を感じました。レモンの「黄」「白い」死の床、「白い」歯、「青」く澄んだ眼、「ピンク」の桜と、色彩の豊かな詩だと思いました。

静物の滅び

片桐歩

机に一個のりんごが座っている
食べごろなのだが
遠ざけていた静物の時間
部屋にこもる埃の中で
固有の甘い香りに浸りながら
過ごした快い目覚め
芯に溜めた蜜が細胞をすり抜け
表皮の穴を通って
空中に漏れる果実汁の薄い
室内は熟れた赤色に染まった
親しんだ香水もうすれ
ついに無臭の固体となった
内部が腐り始めて
表面にしみ出す斑点
永々にリンゴであり続ける願いもたたれ
全体は錆色に姿を変え
形態も崩れ
価値を失い
一つの元素になった

「詩集　美ケ原台地」
（株式会社コールサック社　二〇一一年）

18

りんごという静物は、永遠にその形のまま
そこにあるわけではありません。この詩の中
でも、机の上で甘い香りを放っていた赤いり
んごは、そのうち香りもなくなり、色も変わ
り、腐って形を崩し一つの元素に戻っていき
ます。部屋の机の上にあるりんごが、変化し
ていく様子がとても具体的に書かれていて、
その香りまでが伝わってくるようでした。

Ｋさんのアンソロジーより

はらりとおちた

いわさき、ちひろ

はらりとおちた
スウィートピーの花を
紅茶茶わんの
スプーンの上に
そおっとのせて
はこんでいくと
お客さまは
きれいで
びっくりするわ
それとも
お砂糖とまちがえて
紅茶にうかべてのむかしら

「いわさき ちひろ作品集7 詩・エッセイ・日記ほか」
（岩崎書店 一九七七年）

○鑑賞文

まず、初めてこの詩がのった本を開いたとき、詩にそえてあるイラストが目にとまった。そのイラストは、この詩を書いたいわさき、ちひろさんが描いたものだった。女の子が紅茶カップにスウィートピーの花を浮かべようとしている、詩の内容どおりのシンプルなイラストだったが、私はそのシンプルさにひかれた。詩の内容も同様で、ひらがなが多く使われているのが本当に子どもがこの詩をつくったようで可愛らしく、リズム感も心地良かった。イラストも詩も余白が活かしてあって、その何もない空間でさえもあたたかみのあるものに感じた。

また、私は紅茶に砂糖を少し入れて飲むのが好きなのだが、この詩を読むとその紅茶の味が口の中に広がったような錯覚におちいる。それもあって、私はこの詩が好きなのである。

ソーダゼリープール

すずき　かすみ

あおい　あおい
だれもはいっていない
プールは
どうみても
こうみても
ソーダゼリーにしか
みえません
ぷるん　ぷるん

「十勝っ子詩集　お日さまのにおい」
（北海道新聞社　一九九九年）

○ 鑑賞文

この詩は、小学校一年生の子が書いたものだ。だから、この詩には漢字が使われていない。私は、このひらがな特有のあたたかみがとても好きだ。

「あおいあおい」や「どうみてもこうみても」、「ぷるんぷるん」という繰り返しの表現もとても心地良い。私は、この詩にどこかなつかしみを感じるのだが、それはきっと小学生のときのことを思い出すからだと思う。私はあまりプールが好きではなかったが、それでも夏の暑い日に入るあのひんやりしたプールの気持ち良さったらなかった。あのときの、日の光をうけて輝く青いソーダゼリーみたいなプールが、この詩を読む度に思い起こされる。そういう意味でも、私はこの詩が好きだ。

トクベツ

さわだ　さちこ

「トクベツだよ」
ママは　チョコレートを
パキンとわって
わたしにくれた

だまってたべた
あのときのチョコレート

トクベツって　なあに
わたしはきいた

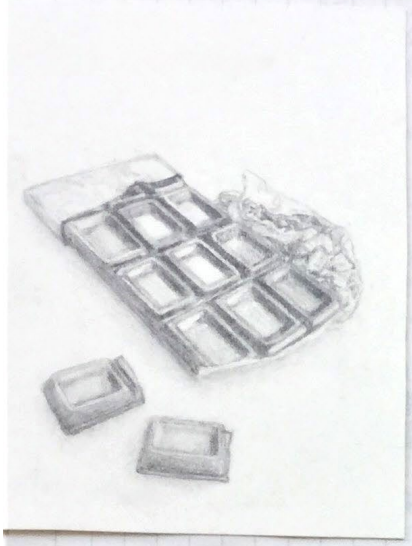
むずかしいことばを
はじめておぼえた

「きょうだけってこと」

トクベツの日

（きょうだけか）
（あしたはないのか）

「ねこたちの夜」
（株式会社　河出書房新社　二〇一三年）



○鑑賞文

この詩で好きなのは、ママとわたしの関係性と、チョコレートの効果音だ。ママはわたしに「トクベツだよ」と言ってチョコレートをくれるが、その後「きょうだけ」と少し厳しいことを言う。その、ただ優しいだけでなく時に厳しい感じが妙にリアルに思えた。機嫌の良い母と楽しく話していても、大抵途中で思わず「ごっ」と言ってしまうような厳しめの言葉が飛んでくる。その優しいけれどもやっぱり時々こわい。が、それでもなんだかんだ好きという親に対する何とも言えない想いが、私とわたしとでリンクしているような気がした。

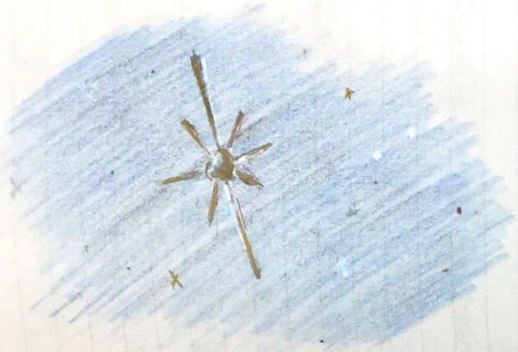
また、私はチョコレートの効果音であるパキンがとても好きなのである。たった三文字だが、「チョコレートをわる」と「チョコレートをパキンとわる」とでは大きな差がある。そのパキンとわったチョコレートから美味しそうな香りが漂ってくる気がして、ついついチョコレートを食べたくなってしまうのだ…。

Ｋさんのアンソロジーより

シリウス

『ラブソング』より

だれもいない
はらっぱで
かぜにふかれていると
こころもからだも
かぜのなかにきえていって
わたしはいつしか
なにものでもなくなる
すると
あなたへの
おもいのたけだけが
まるで
ふゆのよぞらでかがやく
シリウスのように
きわだってくる



石津ちひろ
一九五三〜

三年間のフランス滞在を経て、絵本作家・翻訳家として活動している。

—※—※—※—※—※—※—※—

人間の心はいつも悩み・不安・希望や期待など様々な気持ちでいっぱいになっている。そんな状態に嫌気がさしてそこから解き放たれたくなる。自分の気持ちを一度リセットしてまっさらな状態にしようとする。でも、どんなに消そうとしてもシリウスのようにかがやくおもいは消せない。シリウスは太陽を除けば、地球上から見える最も明るい恒星であるから、どんなに消そうとしても消えない。この詩の場合は恋だけれど、恋以外にも当てはまると思う。その人にとって最も強くおもっているものがそれになると思う。私にとっては何だろう。その光を見てみたい。

※「シリウス」以外がひらがなで書かれているのは、詩をパッとみたときに「シリウス」を極立たせるためだと思った。気持ちを一度リセットしてもシリウスのようにかがやくおもいだけが残るように、この詩のひらがなを全て消しても「シリウス」が残るように。

この世

『田舎詩篇』より

水と水は
おたがいにわからなくなったりしない
水と水は
おたがいをよく知っている
魚たちや水草たちはそれを
ちゃんとわかっている
つまり この世には
いろんな水たちが棲んでいる

風と風は
おたがいにわからなくなったりしない
風と風は
むしろおたがいのちがいをよく知っている
鳥たちや樹々はだから
ほんとにしっかり呼びわける
つまり この世には
いろんな風たちが棲んでいる

このいろんな無数の水たちと
いろんな無数の風たちが
地球を覆っていて
一生懸命より深く包み込む
この大切をやわらかくつよく
すると離みたいに
産まれる いろんな無数のかたち有るものと無いものが

中江俊夫
一九三三～

高校時代に※永瀬清子と出会い詩作をはじめる。
※人間愛にあふれた詩をかく

—※—※—※—※—※—※—

この詩には「人」は出てこないのに、はじめて読んだときに「人」を感じさせた。

「水」や「風」はお互いをよく知っているし、お互いを認め合っているので争わない。しかし、「人」はちがう。「人」はお互いを知っているふりをして、自分の方が優位に立とうとして、お互いを認めていないので争いがおこる。

しかし、私は「人」を感じた。「人」は「水」のような、そして「風」のような存在であるのか？ と問われた気がしたからだ。

三連目のようにこの世がやさしくあるためには、人は要らないのだ。

この世に実際に人はいる。だからこの世を優しさや愛情で包みこんでさらに優しさや愛情をうみだす。その連鎖をつくっていくべきである。

To laugh often and much (Success)

To laugh often and much;
to win the respect of the intelligent people
and the affection of children;
to earn the appreciation of honest critics
and endure the betrayal of false friends;
to appreciate beauty;
to find the best in others;
to leave the world a bit better

whether by a healthy child, a garden patch,
or a redeemed social condition;
to know that one life has breathed easier
because you lived here.

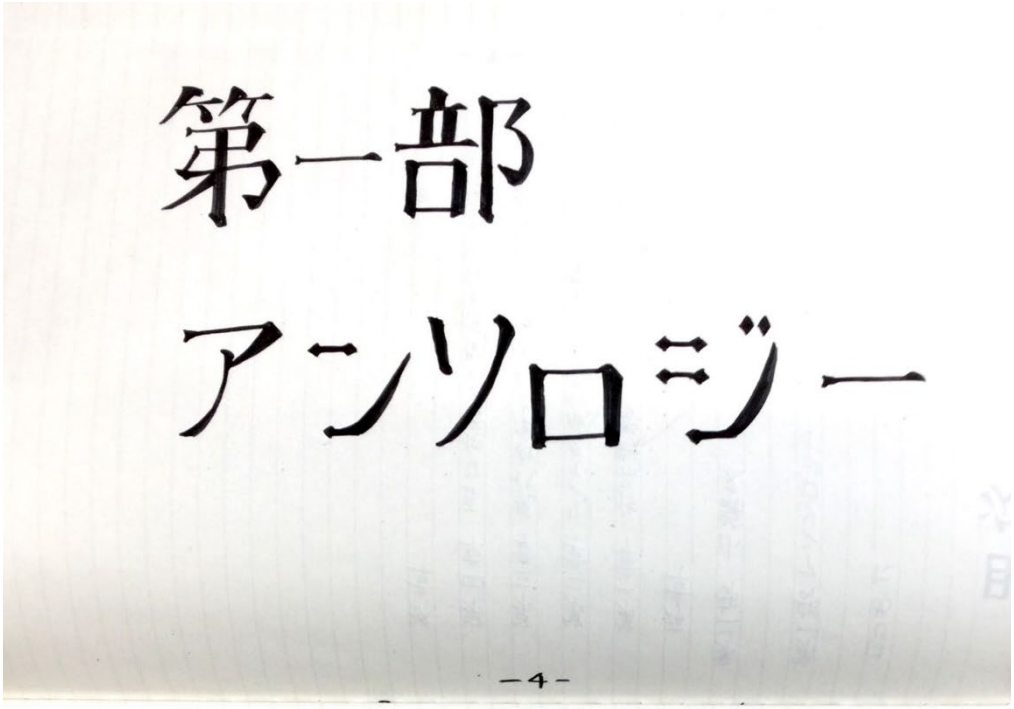
This is to have succeeded.

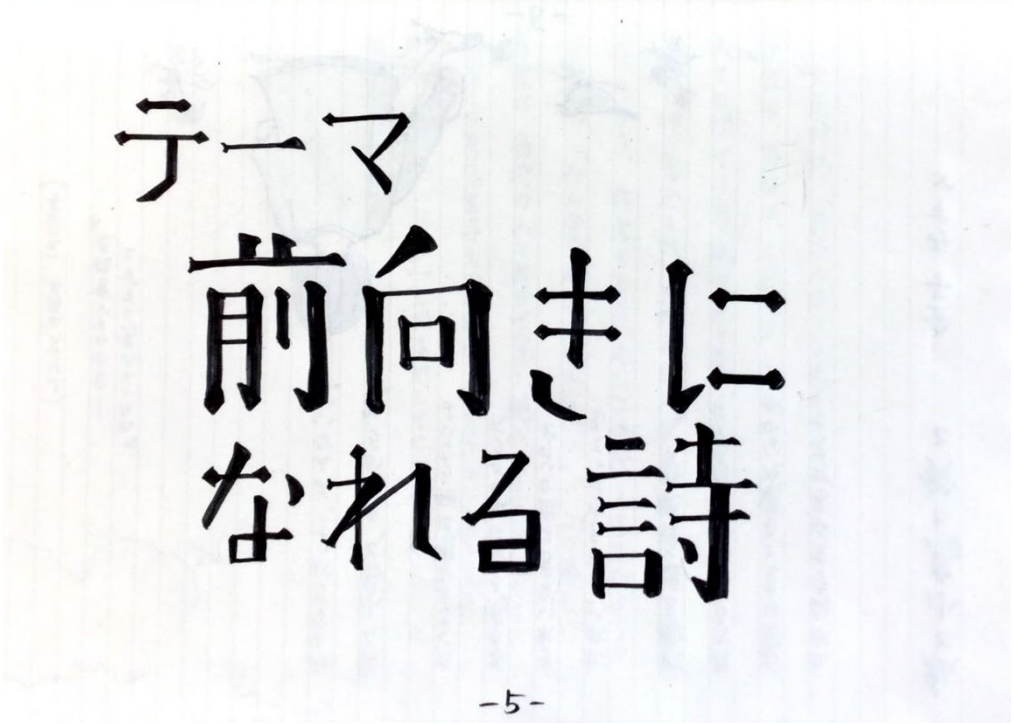
Ralph Waldo Emerson.

(訳)

よく笑い、たくさん笑い、
かしこい人々の尊敬や子供の愛情を得ること。
誠意ある評論家の評価を得ること、
まちがった友人の裏切りに耐えること。
美しいものの価値が分かり、
他人の一番よりところをみつけること。
健やかな子供を育てたり、花だんを作ったり、
社会問題解決によって
世界を少しだけ良くすること。
一つの命がほっと息をつけたのは
自分がここにいたからだと知ること。
これが成功ということです。

大きなことを成し遂げるだけが成功ではない。
誰かにやさしくしてあげた、よく笑ったなど
自分がいることで良い雰囲気やプラスな気持ち
がうまれたことは、どんなに小さなことでも
成功である。





Ａさんのアンソロジーより

私と小鳥と鈴と

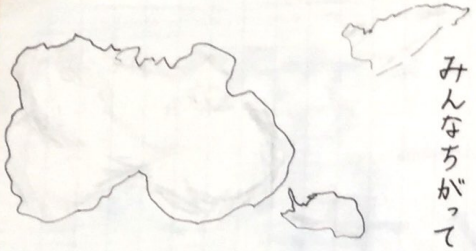
金子 みすゞ

私が両手をひろげても、
お空はちっとも飛べないが、
飛べる小鳥は私のように、
地面を速くは走れない。

私がからだをゆすっても、
きれいな音は出ないけど、
あの鳴る鈴は私のように、
たくさんな唄は知らないよ。

鈴と、小鳥と、それから私、
みんなちがって、みんないい。

『わたしと小鳥とすずと
―金子みすゞ童謡集』
（JUJA出版局 一九八四年）



大正時代、「日本人はこうあるべき」を始めとし、女性は、男性は、子どもは、大人は、などという型が人々の間では常識であった。自分が本当にやりたいことも押さえ込まれ、当時の生活はさぞ精神的に窮屈だったろう。作者もまた、そんな時代を生きたうちの一人だ。「みんなちがって、みんないい」。この優しい言葉は、当時の人々だけでなく、現代を生きる私たちにも多くの勇気を与えてくれる。自分らしさを見失い不安になった心に、そっと火を灯してくれる思いやりに溢れた詩である。

雨ニモマケズ

宮沢賢治

雨ニモマケズ
風ニモマケズ
雪ニモ夏ノ暑サニモマケヌ
丈夫ナカラダヲモチ
慾ハナク
決シテ瞋ラズ
イツモシヅカニワラヒテヰル
一日ニ玄米四合ト
味噌ト少シノ野菜ヲタベ
アラユルコトヲ
ジブンヲカンジョウニ入レズニ
ヨクミキキシワカリ
ソシテワスレズ
野原ノ松ノ林ノ蔭ノ
小サナ萱ブキノ小屋ニヰテ
東ニ病気ノコドモアレバ
行ッテ看病シテヤリ
西ニツカレタ母アレバ
行ッテソノ稲ノ束ヲ負ヒ
南ニ死ニサウナ人アレバ
行ッテコハガラナクテモイ、トイヒ
北ニケンクヮヤソショウガアレバ
ツマラナイカラヤメロトイヒ
ヒデリノトキハナミダヲナガシ
サムサノナツハオロオロアルキ
ミンナニデクノボートヨバレ
ホメラレモセズ
クニモサレズ
サフイフモノニ
ワタシハナリタイ

『雨ニモマケズ』
（フォア文庫 一九九〇年）

「雨ニモマケズ」は宮沢賢治の一番有名な詩だろう。小さい頃、この独特なリズムを気に入りよく暗唱したのを覚えている。

彼の死後、トランクから発見された手帳に書きつけられていたもので、その晩年病床で綴られたそうだ。率直に記された言葉から、賢治の人生における信念がひしひしと伝わってくる。農民への献身を生活の理想にかかげ、人々や自然への優しさを忘れずに生きぬいた彼の作品は、読む者の心にも優しさをもたらし、前を向いて進むために背中を押してくれる。

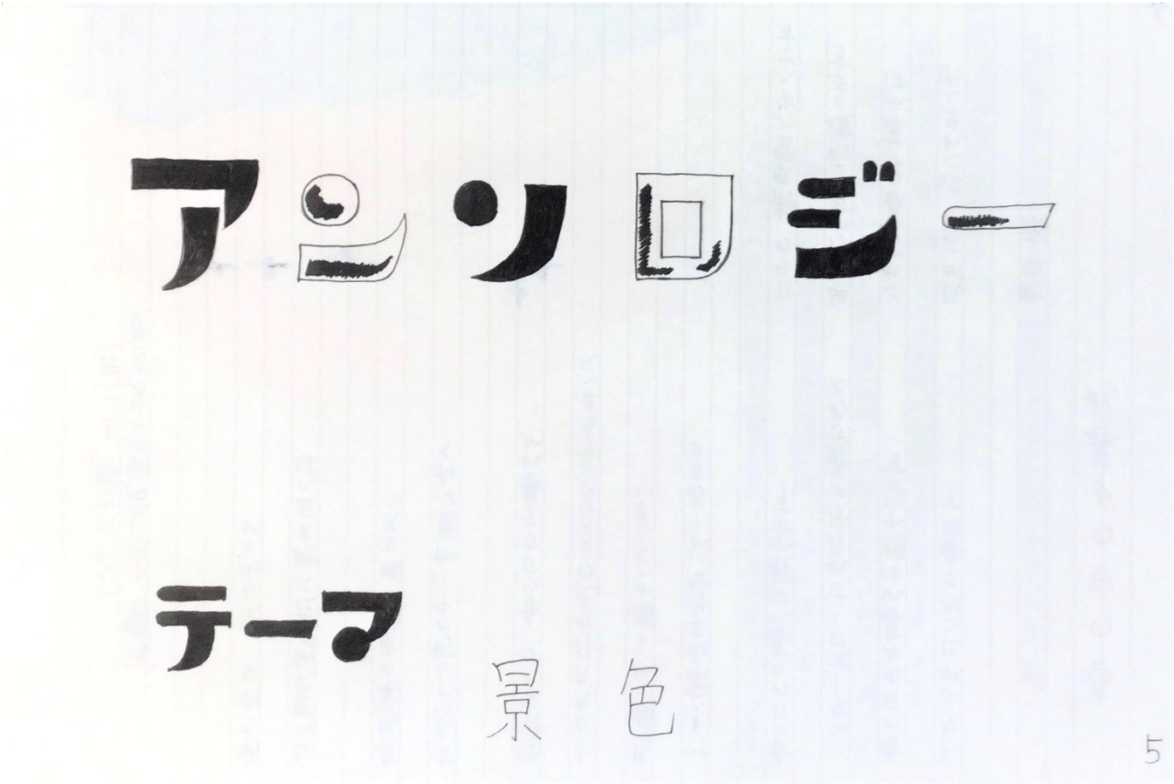
同じ道

高見順

はじめは
同じ道を散歩するのが
つまらなかったが
だんだんと
同じ道に親しむと
同じ道を歩くのが楽しくなった
同じ道でありながら
毎日何か新しいものを見せてくれる
それが新しい道でなく同じ道であることによって
楽しいのであった
今朝は
アレチノギクのはびこった寂しい踏切に
ちんちんちんとベルがひとりで鳴っていて
楽しかった

何気ない日常に目を向けてみると、数え切れない程眺めてきた光景から「何故今まで気が付かなかったのだろう」という発見をすることがある。そしてそんな時その気付きは誰かに教えたくなったり、自分の心にしまっておきたくなったりする。

ちょっとした、ほんの小さな発見が一日をちょっとだけ豊かにする。身の回りにありふれた景色にもうクし目を向けて過ごしたいと思った。



Ｔさんのアンソロジーより

春の日の夕暮れ

町田 康

トタンがセンベイ食べて
春の日の夕暮れは穏やかです
アンダースローされた灰が蒼ざめて
春の日の夕暮れは静かです

吁ー・窠山子はないかーあるまい
馬嘶くかー嘶きもしまい
ただただ月の光のヌメランとするまこに
従順なのは　春の日の夕暮れか

ポトポトと野の中に伽藍は紅く
荷馬車の車輪　油を失ひ
私が歴史的現在に物を云へば
嘲る嘲る　空と山とが

「残響」中原中也の詩によせる言葉
（NHK出版 二〇二年）

私は初めてこの詩を読んだとき何を言っているのか分かりませんでした。難しくて分からなくて何度も読んでみました。

最初四連は次第に暗くなりつつある時間帯を表わしています。のんびりとしている口調で「終わり行くものの静かな色彩感」が秘められているように感じました。ゆっくりと夜へ変わる情景が分かりやすく表現されていてとてもいやされました。だんだんと時代が変わり、自然と必要とされてきたものがなくなる寂しさも感じることができました。

夕暮れの海

高田 敏子

世界がいくら進んでも
人間は　やっぱり
自然が恋しいのではありませんか。
すはだにしみる太陽と風と…
波はもちろん
心の底まで洗ってくれて
砂にねころべば
やさしい会話もしたくなります。
まだ去りがたい
アダムとイブたち
「夕日に向かって　もうひと泳ぎー」
「ええー」

月曜日の詩集
（日本図書館センター　二〇〇四年）

私は「夕暮れの海」という美しいタイトルに魅力を感じてこの詩を選びました。今もなお発展し続ける世界は昔とは違う景色になってしまったが皆自然を恋しく思っているという詩に胸をうたれました。

この詩ではアダムとイブという神話に出てくる人を使い、昔も今も人が自然を想っていることは変わりないということが分かりやすく書かれています。

第二連では自然、特に海で過ごす具体的な例のようなものが書かれ、その場面が想像しやすくなっています。最初は〝海〟や〝夕暮れ〟といった特定の言葉はでてきませんが、だんだん海、そして夕日などタイトルを連想できるような構成になっています。

私は自然や景色といったものがとても好きなので、この詩にとても共感できました。またなぜいきなりアダムとイブが出てくるのだろうと単純に思い、深く考えることができました。私は第二連がきれいな表現がたくさんでてくるので一番好きです。とてもすてきな詩だと感じました。

十月の日だまり

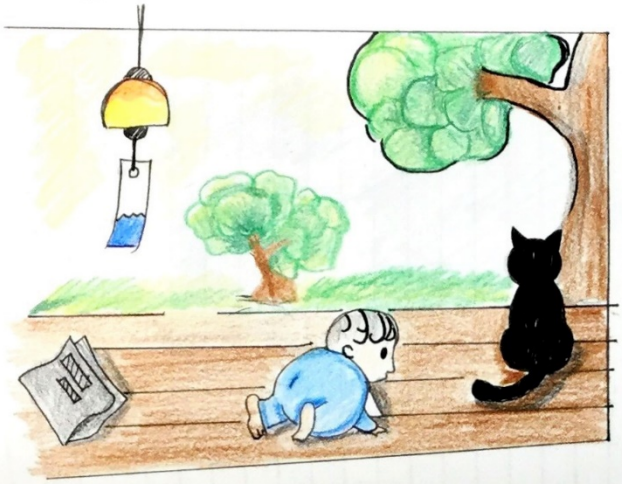
竹内紘子

小春日和の光の中に
すずとメイがはなしをしている
すず　一才九か月
ニンゲンになったばかりで
まだニンゲン語がうまくない
メイ　九才五か月
ネコのばあさん

いっしょうけんめいに
メイをのぞきこみながら
はなしている　すず
ニャーニャーとこたえる

ニンゲンになろうとしている子と
死に近づいている老猫が
ひだまりの中で
おたがいげんきよくはなしている

かたわらの新聞はテロを報じている

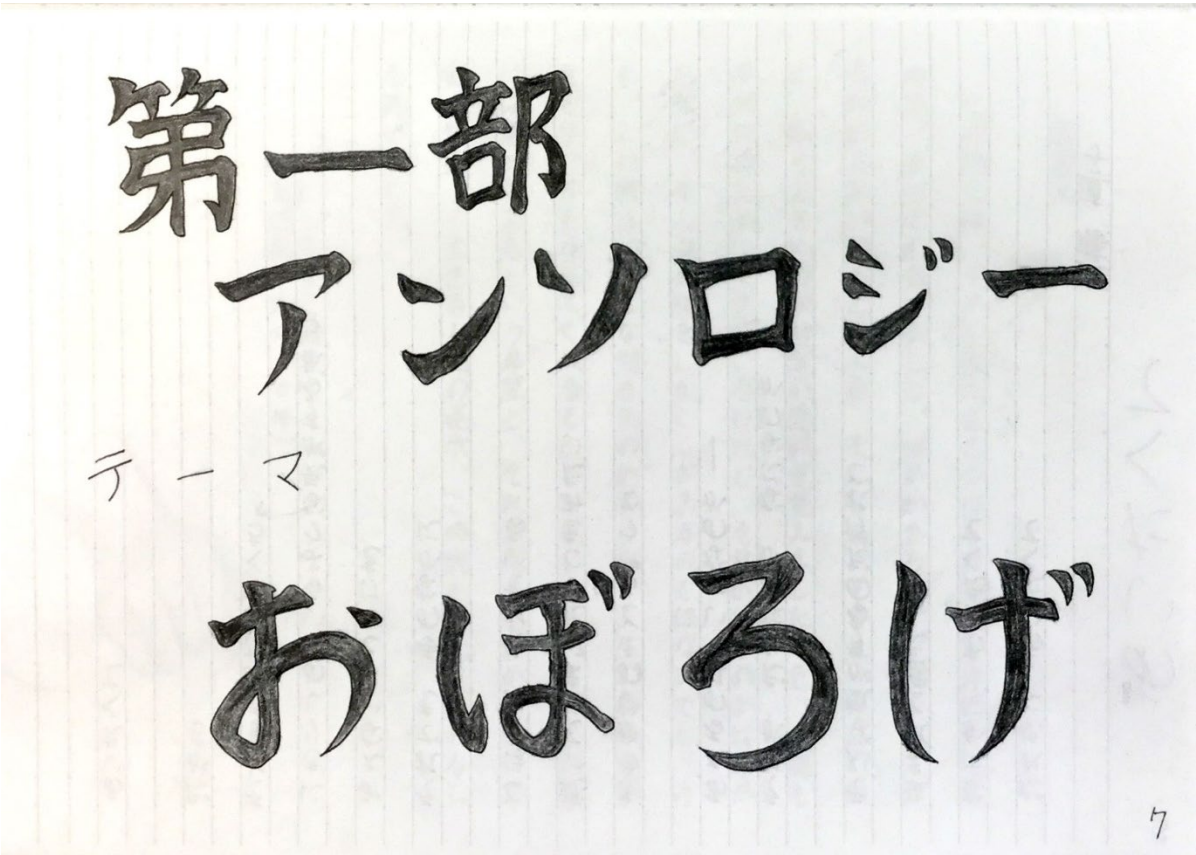


スクールゾーン　子どものための詩集
（らくだ出版　二〇〇五年）

この詩は生と死を合体に書かれています。生まれたばかりでまだうまく日本語（原語）を話すことができないすずともう死が近いメイを比較して生と死について書いています。

読むだけで場面を連想できるような詩になっていて、生と死を日常のふとした時に感じられるようになっています。また最後にいまだソテロを報じている新聞のことを書いたことで、幸せそうなすずとメイの場面とテロという残酷な現実を比較できるようになっています。

私はこの詩をたくさんの人に読んで欲しいと思いました。



Ｎさんのアンソロジーより

あいたくて

工藤 直子

だれかに　あいたくて
なにかに　あいたくて
生まれてきた――
そんな気がするのだけれど

それが　だれなのか　なになのか
あえるのは　いつなのか――

おつかいの　とちゅうで
迷ってしまった子どもみたい
とほうに　くれている

それでも　手のなかに
みえないことづけを
にぎりしめているような気がするから
それを手わたさなくちゃ
だから
あいたくて

鑑賞文

この詩とは、タイトルに引きつけられて読み進めたことがき。かけで出会いました。何かわからない。物かも人かもわからない何かとあえる。そんな気がするというこの詩に、私もえたいの知れない感動を覚えました。きっと誰もが何かのために生きているけれど、それが何なのかはわからない。そんな体験をしたことがあるのではないでしょうか。この詩は、そんな行き先のわからない人生の存在をかたどり、力を与えてくれるものだと思います。また、人生には意味があるという希望と、それが何かもわからない不安を背負って生きる人間の姿が、この詩から読み取れるとも思いました。

「くどうなおこ詩集」
（童話屋　二〇〇〇年）

表札

石垣 りん

自分の住むところには
自分で表札を出すにかぎる。

自分の寝泊りする場所に
他人がかけてくれる表札は
いつもろくなことはない。

病院へ入院したら
病室の名札には石垣りん様と
様が付いた。

旅館に泊。ても
部屋の外に名前は出ないが
やがて焼場の鑪(かま)にはいると
とじた扉の上に
石垣りん殿と札が下がるだろう
そのとき私がこばめるか？

様も
殿も
付いてはいけない。

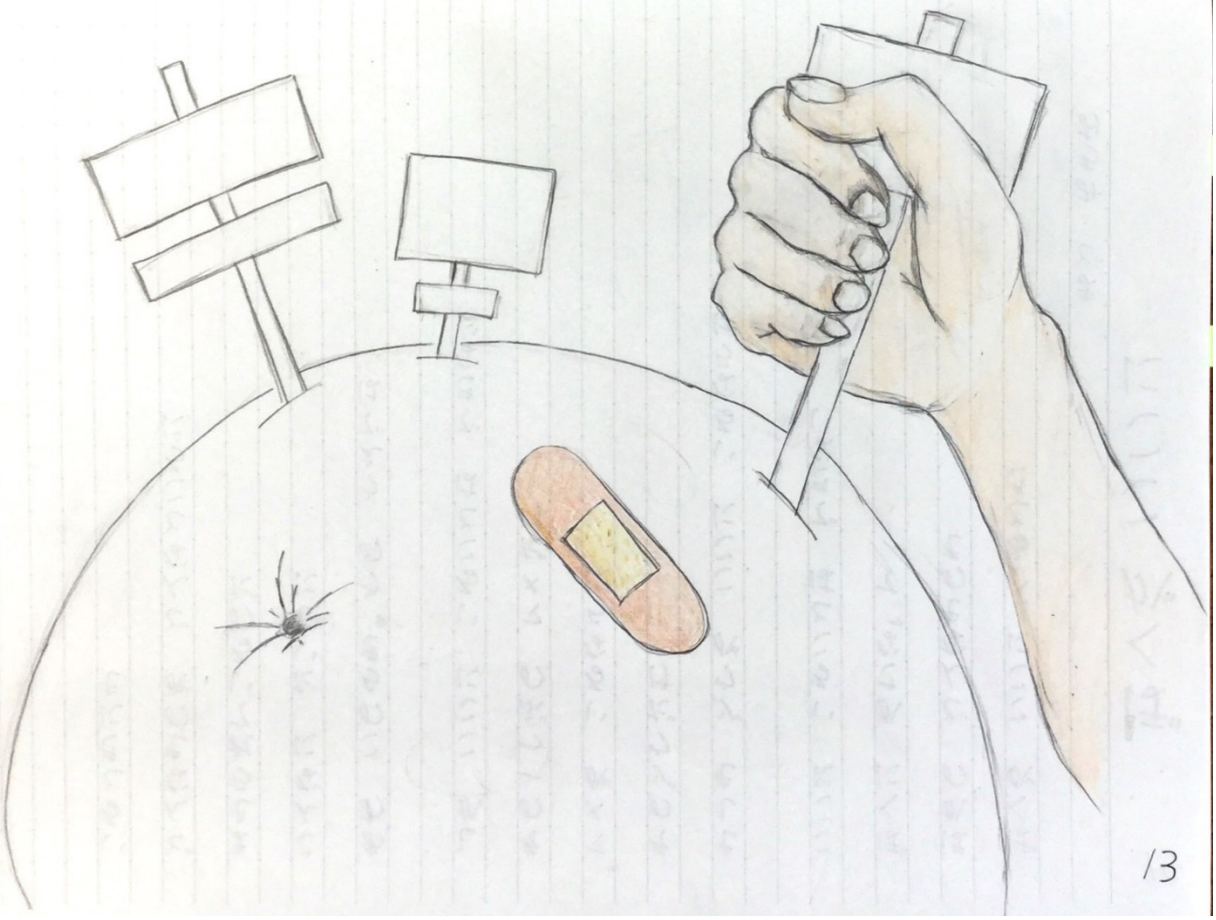
自分の住む所には
自分の手で表札をかけるに限る。

精神の在り場所も
ハタから表札をかけられてはならない
石垣りん
それでよい。

鑑賞文

私達はよく、周りの人を気にかけて、偽の自分を作ってしまいます。他人から見た〝私〟の像を、必死で守ろうとしてしまいます。周りからの評価に惑わされ、本当の自分を見失うことも、あるのではないでしょうか。この詩を読んで感じたことは、人の評価が完璧に的を射ていることなど、そうそう無いということでした。〝様〟も〝殿〟も、本当の私を照らし出すことは、無いということです。つまり、自分を本当に理解できる人は、この世で唯一、自分だけ。ハタから何と言われようが言われまいが、私は私、それで良いのです。そのようなメッセージが、強く心に刻まれ、勇気付けてくれる詩だと思いました。

「表札など」
（思潮社　一九六八年）



14

ぼくが ここに

まど・みちお

ぼくが ここに いるとき
ほかの どんなものも
ぼくに かさなって
ここに いることは できない

もしも ゾウが ここに いるならば
そのゾウだけ
マメが いるならば
その一つぶの マメだけ
しか ここに いることは できない

ああ このちきゅうの うえでは
こんなに だいじに
まもられているのだ
どんなものが どんなところに
いるときにも

その「いること」こそが
なににも まして
すばらしいこと として

「ぼくが ここに」
（童話屋 一九九三年）

15

鑑賞文

何も不思議なことは言っていない、ごく普通のことを言うこの詩。しかし、あまりにも当り前過ぎて、初めてこの詩を読んだ時、「そう言えば、そうであった。」という気持ちになりました。〝ゾウ〟のように大きなモノや、〝マメ〟のように小さなモノでさえ、その空間が守られていること。その素晴らしさと大切さを、改めて感じさせられました。しかし、この世には、その存在を認められない動植物や人間が、あふれる程います。人間の都合で切り倒される木、殺される動物、故郷を追い出される人々。それに比べて、今の私達は、なんと平和ボケしていることでしょう。この詩は、互いがここで生きていることを再確認し、その幸せを思い起こさせる、メッセージを持っていると思いました。

18

死んだ男の残したものは

谷川 俊太郎

死んだ男の残したものは
ひとりの妻とひとりの子ども
他には何も残さなかった
墓石ひとつ残さなかった

死んだ女の残したものは
しおれた花とひとりの子ども
他には何も残さなかった
着もの一枚残さなかった

死んだ子どもの残したものは
ねじれた脚と乾いた涙
他には何も残さなかった
思い出ひとつ残さなかった

死んだ兵士の残したものは
こわれた銃とゆがんだ地球
他には何も残せなかった
平和ひとつ残せなかった

死んだかれらの残したものは
生きてるわたし生きてるあなた
他には誰も残っていない
他には誰も残っていない

死んだ歴史の残したものは
輝く今日とまた来る明日
他には何も残っていない
他には何も残っていない

「日本の詩人17 谷川俊太郎詩集」
（河出書房 一九六八年）

19

鑑賞文

私は、この詩を初めて読んだ時に、ハッと気づいたことがあります。今この地球上には、七十億人以上の人々が住んでいます。数字だけを見ると、とてつもなく多いように見えます。しかし　その一人一人に至るまで、長い歴史と多くの人々の苦悩があったことも事実です。死んだ人々が残してくれた素晴らしい財産は、私達自身なのです。私は、このことに強く衝撃を受けました。生かされた生命を大切に生き抜くこと、その重要さが、この詩から感じられます。この詩は、一度読めばその読者に、生きることの意味を問いかけてくれる詩です。一秒一秒、だんだんと迫り来る死へのカウントダウンをどう生きるのか。常に考え、生きていきたいものです。

―詩のことばは、人間の存在に深くかかわっていて、もっとも深いところにとどかせる言葉―

（本校オリジナル中学生向け進路の手引き“學問へススメ”より）

このアンソロジーを完成させるために、生徒は何冊もの詩集を読みます。中学三年生で詩人たちの言葉にじっくりと向き合える時間があるのは、中高一貫校だからこそ！

自分の好きな詩はこれ、というもの持って高校生になる本校の高校生たち。　皆さんの好きな詩は何ですか？